

歌集『キリンの子』の「地」の歌

片岡 絢

●はじめに

『キリンの子』の出版は二〇一六年二月。もう三年も前である。作者は鳥居。もちろんペンネーム。

刊行日と同じくして同じKADOKAWAから、中日新聞記者の岩岡千景著のノンフィクション『セーラー服の歌人 鳥居』も出た。それは、この歌集の出版が歌壇を超えて注目を集めていたことを物語る。岩岡はあとがきで、〈東京新聞／中日新聞の記者である私はなぜ、こんなに深く、取材対象の一人である彼女と付き合ってきたのでしょうか。(略)、彼女が発する言葉や生み出す作品、その中に、どこか「社会をより良き方向に変えてくれる」期待を感じたから〉と書く。それだけ、鳥居の歌には強烈なインパクトがあり、誰かに何かの行動を起こさせるエネルギーがあるのだ。

鳥居は、新聞をはじめとした取材に臨む際には、成人した現在でも、義務教育の象徴でもあるセーラー服を着る。自分と同じように、いじめや貧困などの理由で義務教育を受けられない子がいることを知ってほしいという気持ちからであるという。また、鳥居というペンネームは、神社の鳥居が人間の世界と神様の世界の境界にあるように、本名や年齢や性別

の境界を越えたいという意図があるそうだ。

歌集のプロフィールにはこう書かれている。〈2歳の時に両親が離婚、小学5年の時には目の前で母に自殺され、その後は養護施設での虐待、ホームレス生活などを体験した女性歌人。義務教育もともに受けられず、拾った新聞などで文字を覚え、短歌についてもほぼ独学で学んだ。〉

私は出版当時、このプロフィールにあるような実体験に基づき作られたであろう、痛ましいとも言える歌のいくつかを読んだ。しかし短歌を鑑賞する以前に、彼女が一体どんな思いをしてこれまで生きてきたのだろうかと考えると、正直に言うとなんか辛くなってしまい、他の歌集のように冷静に読み切れることは難しかった。普段、児童虐待やいじめのニュースが流れると、胸が苦しくなり、テレビのチャネルをさりげなく替えてしまうような私だ。けれども、同じ短歌という形式を選んでいる者として、いつかはきちんと向き合って読まなければならないような気がしていて、心の隅に留めてあった歌集である。

一読したところは、母親や友人の自殺にまつわる歌、児童養護施設でのいじめや虐待の歌などが、他の歌の存在を消し

てしまうほど強烈に印象に残った。しかし、再読のおりには、あたたかくて優しい、普通の歌の良さを再認識するようになった。

三年前の私のように、インパクトが強いあまり身構えてしまい、鳥居という歌人に容易に近づけず、心の中でそとと敬遠したりしていた方に、この稿を通して歌人・鳥居の短歌の「地」の歌とも言うべき歌をお伝えできればと思う。

●日常の歌

水とお茶売り切れになる自販機は大人が多
く居る階のもの

自分が子どもだった時の気持ちを思い出して作った歌だろう。そう言われてみると確かに、雑居ビルのようなところの自動販売機の、大人が多い階でよく売れる飲み物は水やお茶かもしれないと思わせる。ジュースは売れ残って余っているような気がする。ささやかに納得させられる歌だ。

アメリカから届くブロッコリーの箱 緑の
ウサギ飛び跳ねている

八百屋でアルバイトをしていたことがあるという。いかにアメリカの漫画によくあるような絵が描かれていたのだろう。そのウサギの絵を仕事中つい見てしまう、もしくは嫌でも目に入ってくる、そんな状況のなかで生まれた一首だ。歌は地味だがリアルであり、少し愉快さもある。

寝そべって算数ドリル解く午後には野菜の匂
いの雨が降り出す

寝そべってドリルを解いている子どもの姿と、野菜の匂いの雨という、カラフルなイメージの香ばしい恵みの雨が取り合わさっている。平易な言葉で作られた歌だが、詩情があると思う。

町角のポストのなかに隣り合うかなしい手
紙やさしい手紙

ポストの四角い箱の内側の暗闇に、投函されて重なった、内容の違う二つの封筒が目につかぶ。鳥居の想像力の中の、優しい部分が出てくる歌だと思う。鳥居はこの歌のように善悪の判断を入れず淡々と描写する。かなしい手紙のことを否定せず、かなしい手紙であっても、やさしい手紙と同じように、それが書かれた必然性があると感じているかのように並列に表現している。かなしい、やさしい、と平仮名で表現しているところも、やわらかい印象を与える。

牛乳のパック開ければ1頭の牧場の朝がゆ
わんと揺れる

風満ちる畳の部屋に宿題をからりと投げて
仰ぐ夏雲

オノマトペの用いられている二首を挙げた。一首目、牛乳を開封するとき、牛乳の中の牧場の朝が牛乳とともに揺れるのだ。それも「ゆわん」と。新鮮な牛乳の匂いととも、遠い牧場の空や大地を感じさせるような、心を一瞬とおくへ飛ばしてくれる歌である。

二首目は、宿題を終えたのか中断したのか、畳に放り投げた夏雲を仰ぐという歌。「からり」というオノマトペにあと

くされの無さが表れていて、読んでいるこちらにも、なんだかすつきりと堂々とした気分になる。

失ったふるさととおも夢に出て夢の魚を買って帰らむ

ふるさとが夢に出て来て、そのふるさとの中で魚を買って帰ろうかという夢。夢の魚という表現が素敵だ。青みがかつたセピア色の、夢独特の雰囲気が一首を覆っている。どこか懐かしいような歌である。

一日の終わりの青に圧されつつ山際にとどこおる夕焼け

自然詠だ。情景が目浮かぶ、まるで詠み人知らずのような歌だ。美しい夕焼け空を目の当たりにしたとき、あまりの美しさにそれを歌にしたい気持ち、それはもしかすると多くの歌人に共通する気持ちかもしれない。大変な経験を重ねてきたであろう鳥居も、短歌という形式に出会い、それを詠もうとしたのだ。良い意味で普通のおだやかな歌である。

戦火という小題の中から、次の二首を挙げる。

夕焼けのたびに大地によみがえる大空襲のその夜の記憶

快速で越す橋の下いくつもの戦火映してき

た水面あり

一首目、夕焼けがくるたびに、大地は大空襲の夜の記憶を思い出すという歌。戦争はたしかに人間などの生物だけでなく、大地そのものも経験したことである。人間がその記憶を忘れても、大地は夕焼けのたび、つまり毎日のようにそれを

思い出すという。考えが壮大であり、美しいような哀しいような歌だ。

二首目は、今度は大地ではなく、川と戦争との関係を描く。火が川に映っている光景は美しいだろうが、ただの火ではない。鳥居が考えるのは戦火だ。戦争中、戦火を映すこととできないなかった川の悲哀に思いは及んでいる。

オレンジの皮に塗られた農薬のよような言葉
をひとつ飲みこむ

苦々しい言葉、言う方も言われる方も互いに傷つくような言葉がある。そういった言葉が心に発生し、言おうとして喉元まで出しかけたものの声にして放出しない場合、それは、それを言おうとした側の体内に再度取り込まれることになる。そのことを改めて発見させられた一首だ。ただでさえ苦さを持つオレンジの皮、そこに人体に有害な農薬が付いている、そんな苦い言葉を言つて両者で傷つくことと、言わずに自分が飲み込むことと、いったいどちらが良いのだろうと考えてしまう。

●母恋の歌

日常の歌の他に、心惹かれた、母を詠んだ歌を挙げたい。

目を伏せて空へのびゆくキリンの子 月の

光はかあさんのいろ

コロッケがこんがり揚がる夕暮れの母に呼ばれるまでのうたた寝

大きく手を振れば大きく振り返す母が見え

なくなる曲がり角

サインペンきゅつと鳴らして母さんが私の
なまえを書き込む四月

味噌汁の湯気やわらかくどの朝も母はわれ
より先に起きていて

手を繋ぎ二人入った日の傘を母は私に残し
てくれた

タイトルになった二首目の歌には、やはり鳥居の思いが詰まっている。童話的で幻想的だ。母娘の間には色々なことがあり、そしてその母はもうこの世に居ないが、永遠に母に焦がれる純粹な子どもの姿が詠まれている。「目を伏せて」が鳥居らしい。顔を上げてまっすぐに向かっていくのではなく、目を伏せておすおすと遠慮がちに母へ寄っていくのだ。かつてこの世に存在したひと組の母娘の、しかしかけがえのない結びつきを感じる。

ここに挙げたような優しく温かい母の姿を詠んだ歌に、私は読者として救われる思いがした。

●おわりに

私が最も心打たれた歌は、次の歌である。

振り向かず前だけを見る参観日一人で生き
ていくということ

授業参観日。私にとっては、親が自分の領域である教室に来ることの非日常さ、嬉しさや恥ずかしさなどが混ざったソワソワする日だった。みんなそう思うものだと思っていた。

しかしそれは、親がいる子、親が来る子に限定の感情だったのだと、この歌を読み、今さらながら想像力のない自分を突き付けられた気がした。そして、何十年前のその日のことを振り返り、この鳥居の歌のように、まっすぐに前を見据えていた子が教室には居たかもしれないなかつた、と思うのだ。意思に満ちた、美しい、とても悲しい、凜とした眼差しがあつたかもしれないと思うのだ。

この稿では、あえて、歌集の中から日常の歌、母恋の歌を挙げた。実作者ではない人や、普段から短歌を読まない層の読者は、生い立ちの情報などのセンセーショナルな歌に目が留まるだろう。しかし、鳥居の美質はそれだけではない。日常のなにげない歌や自然詠も、きちんと表現している。

自分の経験を、短歌を作るという目的のために本当に深くまで掘り下げて観察しに行くと、最後にはやはりどうしたつて、人間は誰もが愛情を持っているということに気が付くことになる気がする。

だから、実は短歌作品の方が副産物であり、作品を作るためにみずからの内奥へ踏み込んでゆくこと、事象や感情を目をそらさずに見つめること、その結果、実は過去のどの瞬間のどの場面にも流れていた愛が付くことの方が主体であり、短歌を作ることの一番の報酬ではないだろうかと私は改めて思った。

できあがった作品である短歌をとおして、誰かの心が揺さぶられ、社会が少しでも良くなるならなお良い。私には何ができるだろう、と考えずにはいられない。